

研究主題 「主体的に和楽器に関わり、協働して音楽活動を楽しもうとする 生徒の育成 —自ら表現し、生き生きと楽しめる和楽器の指導—」

東京都教職員研修センター研修部授業力向上課

都立光明学園 主任教諭 柳田 和美

第1 研究のねらい

肢体不自由のある生徒は、身体の動きやコミュニケーションの状態、認知の特性により、様々な学習活動が困難になることが多く、これらの困難を改善・克服するように指導することが必要である。器楽の活動においては、身近で比較的操作が容易な打楽器などは主体的に関わる様子が見られる。しかし、操作が複雑な楽器については、演奏に困難さが見られる場面もある。

特別支援学校小学部・中学部学習指導要領（平成29年4月告示）の第二節、中学部〔音楽〕の2段階の目標に、「主体的に楽しく音や音楽に関わり、協働して音楽活動をする楽しさを味わいながら、様々な音楽に親しむとともに、音楽経験を生かして生活を明るく潤いのあるものにしようとする態度を養う。」と示されている。音楽活動の楽しさを味わうためには、自ら楽器を演奏するなど主体的に音楽に関わることや、音色や響きを感じて友達と一緒に合奏を楽しむことが重要である。そのために、教員は、働き掛けや伴奏を工夫することなどで、音楽活動に対する生徒の意欲を高め、より一層、音色や響きを感じて、友達と一緒に合奏を楽しめるようにすることが大切である。また、奥深い音色に特徴があり、響きの美しさに魅力がある和楽器の弦楽器に親しませることで、我が国の文化への関心を高めたり、様々な音楽に親しみ音楽経験をより充実させたりすることが期待できる。

以上のことから、肢体不自由のある生徒が主体的に和楽器に関わり、協働して音楽活動を楽しもうとすることができるよう研究を行う。

第2 研究仮説

自ら表現し、生き生きと楽しめる和楽器の指導を行うことで、主体的に和楽器に関わり、協働して音楽活動を楽しもうとする生徒が育つであろう。

第3 研究の内容と方法

1 基礎研究

(1) 和楽器の指導法について

都内の特別支援学校を訪問し、和楽器の指導の状況を把握するために視察した。

ア 和太鼓などの打楽器は、身近で比較的操作が容易であるため授業に取り上げている。

イ 箏や三味線、大正琴を取り上げている実践もあるが、肢体不自由特別支援学校においては、補助具を工夫するなど試行錯誤しながら指導している。

(2) 様々な弦楽器の特徴について

我が国や郷土の伝統音楽及びアジア地域の諸民族の音楽の弦楽器には、どのような特徴があり、奏法や音色がどのように違うのかについての調査を行った。

2 調査研究

都立特別支援学校15校（肢体不自由教育部門・知的障害教育部門）の音楽科教員56名に、「我が国や郷土の伝統音楽(和楽器)」の授業における指導法について、質問・記述式によるアンケート調査を実施し、結果を分析した。

調査結果で得たデータを基に、音楽科教員が生徒の指導法で配慮していることについて、まとめた（表1）。

調査項目「和楽器の指導法で、生徒に一番配慮していることについて」では、「手の操作性の工夫」が全体の41.2%を占め、最も多かった。手の操作性に配慮することで、箏や三味線など、奏法の困難な弦楽器を弾けるようにすることを重視した指導の工夫が必要であることが分かった。

調査項目「生徒への働き掛けで一番大切にしていること」では、「受容・応答」が46.4%と最も多かった。「受容・応答」に関わる自由記述から、「生徒が音楽を味わって聴き、一緒に楽しく協働して活動することにつながるのではないか」という意見が見られた。なお、「受容・応答」とは、生徒の出した音、動き、表情などを教員が受容し、その状況に応じて伴奏などで応答するという働き掛けであると捉えた。

調査項目「生徒が意欲的に楽器を鳴らすために工夫していること」は、「自発性を促す場面の工夫」が28.9%、「補助具の工夫」が28.9%であった。自由記述から「自発性を促す」ために教員が工夫していることは、「自由に表現できる場面や、みんなの前で演奏できる場面を設定していること」、また「補助具の工夫」からは、「自分の手や腕の動きで鳴らせるように楽器の位置や補助具を工夫すること」などが見られた。調査結果より、楽器に「触れよう、音楽を奏でよう」という生徒の意欲を引き出すために指導法を工夫していることが分かった。生徒が主体的に和楽器に関わり、協働して音楽活動を楽しもうとするためには、和楽器の指導における工夫を一層充実させていくことが課題であると考えた。

表1 質問紙の調査結果「音楽科教員が生徒の指導法で配慮していることについて」(上位2項目のみ表示)

和楽器の指導法で一番配慮していること	1 手の操作性の工夫	41.2%
	2 言葉掛けの工夫	17.4%
働き掛けで一番大切にしていること	1 受容・応答	46.4%
	2 称賛・励まし	26.7%
意欲的に楽器を鳴らすために工夫していること	1 自発性を促す場面の工夫	28.9%
	2 補助具の工夫	28.9%

3 開発研究

(1) 和楽器の指導における補助具の開発

ア 筋緊張がある生徒には、形を自由に変形できる棒状の素材に爪を付けた「変形自在爪」やドラムスティックにピックを付けた補助具を開発し、動かせば弦を鳴らせるようにした。

イ 触覚過敏がある生徒などには、ギター用のピックに補助具を付けたオリジナル補助具を開発し、指や腕の動きだけで音を鳴らせるようにした。

ウ 生徒の実態に合った箏の譜面を開発し、視覚支援の工夫で自分から弾けるようにした。

エ 生徒の実態に合った色付きのシールなどを活用した三味線及び大正琴用の譜面を開発し、視覚支援の工夫で自分から弾けるようにした。

(2) 「特別支援学校 和楽器の指導における工夫」の開発

都立特別支援学校肢体不自由教育部門・知的障害教育部門の音楽科教員に実施した「我が国や郷土の伝統音楽の指導法」についてのアンケート調査を活用し、アンケート結果を、類似する指導方法や教材・教具及び学習環境の工夫等について、4項目に分類した。さらに、生徒に

対して期待される効果や指導上の留意点も記述し、都立特別支援学校で活用できるようにした試案の資料である（表2）。

表2 「特別支援学校 和楽器の指導における工夫」（試案）抜粋

研究主題	項目	指導法	期待される効果	指導上の留意点
音楽活動を楽しもうとしたり、協働して生徒の育成	① 環境の設定	生徒が動かせる可動域の範囲に台や楽器を設置する	音を鳴らしてみたいという気持ちが高まる	楽器が弾きやすいよう机の高さ・位置などを調整する必要がある
	② 補助具・楽器などの工夫	自分の指で鳴らせるようオリジナルの補助具を付ける	個に応じた工夫により、自分から音を鳴らそうとする	箏の爪が指に合わない場合、オリジナルの補助具を活用する
	③ 場面の工夫	みんなの前で発表する機会を設ける	みんなの前で演奏できる達成感を味わうことができる	頑張ったところを褒めて、次の活動の意欲につなげられるようにする
	④ 伴奏の工夫	曲の合間にソロを設けて、音を出す箇所を分かりやすくする	友達の音や教員の伴奏に合わせようとする	教員に音を合わせようとする動きが出たら、一緒に合わせて弾く場面を増やす

4 検証授業

(1) 検証授業の概要（令和元年10月28日から12月9日まで、全6時間）

都立特別支援学校 肢体不自由教育部門 中学部第1学年から第3学年までの生徒8名を対象に、題材名「和楽器に関わり、みんなと一緒に合奏を楽しもう」の検証授業を6回実施した。この検証授業では、「主体的に和楽器に関わっていたか」、「協働して音楽活動を楽しもうとしていたか」を検証の視点とし、生徒の変容を分析し結果をまとめた。

(2) 検証授業における生徒の実態の変容について

一人一人の生徒の実態に応じて「主体的に和楽器に関わっていたか」、「協働して音楽活動を楽しもうとしていたか」の2点の行動について、(表2)を用いて検証を行った。その結果、生徒の変容等を、(表3)にまとめた。

(3) 「和楽器の指導の工夫」を用いた指導の有効性について

肢体不自由のある生徒は個々の障害特性により、楽器を演奏するときにそれぞれの困難さが見られるので、教員は指導を工夫する必要がある。

本検証授業では、和楽器の中の弦楽器を演奏する場合、「和楽器の指導の工夫」の4項目、①環境の設定、②補助具・楽器などの工夫、③場面の工夫、④伴奏の工夫に基づいて指導を工夫することで、生徒の変容を見ることができた。

まず、①「環境の設定」では、個々の生徒の実態を十分に把握し、楽器を置く高さを調整するなど、設置の工夫を行うことにより、生徒が主体的に楽器に関わろうとする意欲が高まっていることが分かった。

次に、②「補助具・楽器などの工夫」では、色付きのシールを使った楽譜を用意し視覚支援を工夫したところ、生徒は視線でシールを追うようになったり、自分から箏や三味線を弦で弾いたりするようになった。また、生徒に応じて開発した補助具を使用したことで、オリジナル補助具を付けて箏を意欲的に弾けるようになったり、筋緊張の生徒が大正琴を弾けるようになったりした。大正琴（ソプラノ用）については、楽器が比較的小さく簡単に音を鳴らせるという効果があった。大正琴（ベース用）は、アンプをつないで弦の音を電子音で補うことで、指

の力が弱い生徒でも自分の操作で出した音を確認でき、自分から音を鳴らそうとする場面が増え、生徒が意欲的に関わる事ができた。

続いて、③「場面の工夫」では、和楽器に親しませる時間をつくることで、生徒が意欲的に楽器に関わるようになった。また、みんなの前で発表する機会をつくり、一人での演奏場面を設けることで、他の生徒が注目する中で演奏できるようにした。ソロで演奏する場面では、自分の音に集中し、自ら意欲的に楽器を鳴らし、達成感を味わわせる事ができた。

最後に、④「伴奏の工夫」では、曲の合間にソロを設けて音を出す箇所を分かりやすくしたり、生徒の演奏できるテンポに合わせて伴奏を工夫したりすることを繰り返した。特に、生徒の弾いた音を盛り上げるような伴奏のときには、生徒が自分の音に注意を向け、伴奏の音に耳を傾けて意欲的に楽器を鳴らす場面が見られた。教員が生徒の出した音をよく聴き寄り添うことで、教員の音に合わせようとする動きが出るようになった。これらの工夫を踏まえた上で一緒に音を合わせて弾くという場面を増やす試みを行ったところ、生徒と一緒に音を鳴らすことに集中し、「何度も弾いてみよう」という気持ちが芽生え、合奏しようとする協働性を培う事ができた。

表3 「和楽器の指導における工夫」による生徒の変容 検証結果

研究主題	生徒	生徒の実態 (検証実施前)	和楽器の指導の工夫	生徒の変容 (検証結果)
音楽活動を楽しもうとする生徒の育成	生徒 A	【主体性について】 筋緊張のため、手や腕が自分の思うように動かしにくく、 <u>楽器の操作に困難さがある</u>	【補助具・楽器などの工夫】 形を自由に変形できる棒状の素材に爪を付けた「変形自在爪」を使用する	補助具の工夫により操作性を向上させることができたため、自分から手を動かし、音を鳴らす場面が増えた
		【協働性について】 弾くことに時間がかかり、音を鳴らす経験や達成感が十分とはいえない	【場面の工夫】 みんなの前で発表する機会を設ける	みんなの前で発表する経験を通して、自分の弾いた音を実感し、達成感を味わいながら演奏することができた
	生徒 B	【主体性について】 音を鳴らすことはできるが、一定時間続けて演奏することが難しい	【補助具・楽器などの工夫】 三味線用の楽譜を用意し、色付きのシールを楽譜に付け、視覚支援を工夫する	色付きのシールを見ることにより、曲の始めから終わりまで、意欲的に弾くことができるようになった
		【協働性について】 自分の鳴らす音だけに集中している	【伴奏の工夫】 曲の合間にソロを設けて、音を出す箇所を分かりやすくする	ソロで弾くことで自分の音や伴奏の音に集中できるようになり、伴奏に合わせられるようになった
	生徒 C	【主体性について】 箏爪では弾きにくく、 <u>演奏に困難さが見られる</u>	【補助具・楽器などの工夫】 オリジナル補助具を付けて演奏できるようにした	爪が外れにくくなったので弾きやすくなり、意欲が増して演奏できるようになった
		【協働性について】 他の楽器と合わせるときに、自分のテンポで弾こうとする	【伴奏の工夫】 生徒の演奏できるテンポに合わせて伴奏を遅らせたり、速めたりする	弾くことに精一杯だった様子から、他の楽器の音に注意を向けながら主旋律を弾けるようになった

第4 研究の成果

「和楽器の指導における工夫」を開発し検証したことで、肢体不自由のある生徒が、自ら生き生きと主体的に和楽器に関わる事ができ、協働して音楽活動を楽しむ事ができた。和楽器の中でも、特に弦楽器の指導における工夫を示す事ができた。

第5 今後の課題

「和楽器の指導における工夫」において、引き続き検証を実施し、より一層生徒の実態に応じた効果的な指導を開発していくことが課題である。

また、肢体不自由のある生徒の実態は様々であるので、個々に合った環境・補助具・楽器・場面・伴奏の工夫などを検証し、音楽活動をより充実させていくことが今後の課題である。